

各位

真宗興法議員団1期生一同

宗祖親鸞聖人750回御遠忌法要プラン（素案）の提言

〔1〕プランの機軸（コンセプト）

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌「基本計画」中間報告（以下、中間報告）によれば、すでに30日間の法要期間と定められているが、何を根拠としてこの期間が制定されたのか。まず、この点に疑問を感じる。なるほど、蓮如上人の反省をふまえて、詰め込み式をやめ、椅子の指定席、一般参拝席を設けること（P.9）は賛成だが、日数30日（P.7）は短すぎないだろうか。

今回提案するプランは、はじめに法要期間ありきではなく、「ご懇志をいただいた全門徒が、一度は参拝・参加出来る御遠忌」という視座から発想している。つまり、全門徒をお迎えするにはどれだけの法要期間が必要かという発想である。

中間報告では、「一日の法要座数については、晨朝を入れて三座までにすべきである。（P.9）」また、「入堂退堂に要する時間的余裕を持たす必要がある（P.9）」という指摘があり、この点については賛同できる。が、実質、時間的余裕を見れば一日8000人程度の参拝者ということになるのではないか。すなわち30日間で最大24万人の参拝者数となる。

この24万人を、単純に一般寺院9000ヶ寺に割り当てれば、一ヶ寺当たり約27人となる。「宗門挙げて」という宗祖の御遠忌としては、あまりに少ない数字ではないか。

さらに、「宗祖としての親鸞聖人に会う」ということであれば、既存の門徒のみにとどまらず、これまで真宗の教えに出遇うことがなかった人々、そして、広く全人類に対して今回の宗祖御遠忌をアピールすべきであり、そのことを真摯に受け止めれば、門徒数を超えて、さらに多くの人々が参拝できるプランを策定しなければならない。

また、価値観がここまで多様化し、情報氾濫した現代において、従前の「本山→教区→組→一般寺院→門徒」という単一的な情報伝達形態・動員方法のみでは、とうてい多くの人に今回の「宗祖御遠忌法要」を周知できないことは明白であろう。この点も十分に考慮すべきである。

繰り返しになるが、あくまで「全門徒」、そしてこれに加えて「この御遠忌を機縁として親鸞聖人の教えに出遇った人」すべてが参拝・参加できる御遠忌法要ということが、今回のプランの基本的な視座である。

ぜひとも期間を30日と限定せず、日数に幅を持たせて予算を考えていただき、「全僧侶全門徒参拝・参加型」として最終報告としていただきたいと考える。

〔2〕プランの全体像（概要）

中間報告でも、儀式の見直し、法要式のあり方等の問題が提起されている（P.8）が、今回の宗祖御遠忌では、さらに多様な法要の形態を具体的に示すことが必要であると考えます。

この考えを推し進めれば、中間報告で「記念行事（イベント）の基本的なあり方（P.9）」についても言及されているが、記念行事（イベント）も、全体として儀式法要になるような取り組みが大切である。まずこのことを確認したい。伝統儀式による法要だけにこだわれば、従前のような日数割り、そして門徒動員数という考えにおちいるのではないか。

そうではなく、2011年一年間を「御遠忌年（ネーミングは仮称）」と位置づけ、御遠忌法要を策定すべきである。当然、この一年間は平時でも日中法要に「宗祖親鸞聖人を語る法話」を加えた形の教化事業を行う。

これに加えて、以下に、仮に90日間の特別法要の例を示す（先にも述べた通り、これも日数の一例であり、決して現在30日のものを90日にすればよいということではない）。

西本願寺の「蓮如上人五百回御遠忌法要」で行われた、いわゆる「百日法要」に対しては、期間が長すぎて「間延びしていた」等の意見を聞くが、それはあくまで主催者側の意見であり、門徒の立場に立てば、「一度限りの御遠忌に参拝できた」という感動があったことであろう。視座は門徒・参拝者におくべきであり、主催者側の都合で考えるべきではないし、もし、主催者側の都合のみでプランを策定すれば、参拝者にとっては、決して満足のいく御遠忌とはならないことは明白である。従前からある発想では、もはや時代社会に対応できないことを指摘しておく。

＜90日間法要の例＞

【15日間】伝統儀式による法要・・・式務部主催（法話あり）

【15日間】音楽法要・青少幼年法要・・・青少年部主催

（青少幼年センターで示されている願いを表現する儀式・声明・法要・法話）

【15日間】法話大会・・・教学研究所主催

（絵解き等もあり、勤行は正信偈同朋奉讃式のみ）

【5日間】・・・女性室主催

（男女両性で形作る教団の願いにそった、儀式・声明・法要・法話）

【5日間】・・・同推主催

（人権尊重、反差別にそった儀式・声明・法要・法話）

【5日間】・・・企画室主催

（現在、企画室で取り上げていること、例えば21世紀ビジョン委員会での方向性をアピールする儀式・声明・法要・法話）

【 5日間】・・・研修部主催

【25日間】・・・各教区主催

(教区に企画や法要出仕など、全て任せる。予算面も補助金を出して、
教区予算で執行する)

これは一例であるが、参拝者が自主的に「自分が参加したい法要に参拝出来る」ことを基本とする。そのためにも中間報告でも若干触れられている、椅子席の設置・座席の予約制等は当然必要である。また、各法要ごとに魅力的で個性的なプランを策定しなければならない。

さらに、これも「蓮如上人五百回御遠忌法要」の反省点であると考えているが、単に時間を区切られた法要参拝だけでなく、ゆったりとした滞在型の御遠忌参加プランとして、「白州でのバザール」「門前市」「大道芸」などの周辺イベントも同時に考慮すべきである。そのためには、本山周辺の商店街・宿泊施設・京都駅周辺の施設等との緊密な連携も必要である。

また、「塀の外」での法要・イベントとして、祖廟・大谷大学・大谷専修学院・涉成園・岡崎別院等、広い視野を持ち、一年間を通しての企画が重要であると考えている。

〔3〕法要プランの具体的策定方法について

プランの策定について、文字通り時代社会に応じた様々なアイデアを企画・実行するには、もはや宗門内部のみでは不可能であろうと考える。そこで、以下の方策を提案する。

(1) 各種法要内容および、各種イベントのベーシック・プランは大手広告代理店に協力を依頼する。

具体的には「電通」「博報堂」が考えられる。ご承知のことと思うが、先の「サッカーのワールドカップ」、「長野オリンピック」等、日本における大イベントは、そのほとんどは上記2社が行っている(特に電通が中心になっている)。当然これらのイベントには、周辺事業も含め様々な企画・アイデアが盛り込まれている。また、広告・イベントを制作する広告代理店は、常にクライアント(発注者、今回で言えば真宗大谷派)と参加者の満足度を基本に企画立案している。

したがって、広告代理店が単なる営利企業ということではなく、発注するクライアントである当派が、「親鸞聖人の教え」を正確に伝えることで、広告代理店は、教義に沿った形の適切で斬新な企画・アイデアを提供できる。提案された企画・アイデアを取捨するのは当派の判断によるので、出された企画・アイデアの中から採用することが可能で

あり、当然、当派側提案の企画についても、十分協議ができる。

時代社会に対応した御遠忌を願うならば、この方策によって、より一般にもわかりやすいアイデアが具現化でき、社会全体にアピールが可能であると考ええる。

- (2) 音楽法要等に必要な機材や待合い用の仮設テント、周辺イベントの仕掛けなどを含め、御遠忌に必要な機材・人員誘導・警備・清掃・交通機関の手配・宿泊の手配等も、すべて大手代理店に一括依頼する。

これらの大手代理店にとっては、今回の「宗祖御遠忌法要」程度の動員数・期間のイベントは、先に挙げたオリンピック等とは比べるべくもない程の規模である。イベントの運営自体も含め、警備・人員誘導等のノウハウは十分であると考ええる。また、一括してさまざまなことを依頼できるので、予算・経費の明確化、管理責任の一元化も可能となる。

- (3) 各寺院・ボランティア団体・市民団体（NPO等）に、ボランティア上山（仮称）を呼びかける。

現代社会において、市民団体の活動はますます増大する傾向にあり、いまや無視できない存在となっている。各教区の門徒組織はもちろんだが、これら様々な団体に、「何か自分の出来ること」で御遠忌参加を呼びかけるべきである。たとえば、上記（2）の部分だけでも、人員誘導・警備・清掃等の運営管理責任は広告代理店に任せつつも、門徒組織をはじめとして、これら市民団体の参加を広く呼びかけることで「参拝型」ではなく、「参加型」御遠忌を策定することが可能であると考ええる。さまざまな側面で、この「参加型・多くの人々と共に創る御遠忌」を目指すべきである。

また、上記（1）の企画について、各教区からもプランを募集すべきである。そうすれば、各地域ごとの特色を出すことも可能になり、なによりも本山と教区の一体感を盛り上げることができると考える。

[4] おわりに

以上、素案としてプランを提言をさせていただいたわけであるが、今回の御遠忌基本計画策定には、もうひとつ重要な意味がある。それは、先の「蓮如上人五百回御遠忌法要」がそうであったように、本山で行われた御遠忌の内容が、そのまま各教区に影響を及ぼすのである。つまり、本山で出されたアイデア以上の御遠忌は各教区では実現出来づらいという現実がある。

そうなる理由は本文の中でも若干述べたが、大きく言えば下記の2点に集約される。

- (1) 宗門内部の企画によるプラン策定である点
- (2) 現状宗門が、主に「本山→各教区」という上意下達型の情報伝達網しか持っていない点

この2点については、私ども宗議会議員にも大きな責任があると考え、今回このような提言をさせていただいた。

また、次の点にも十分考慮して頂きたいと考える。

- ・ 法要の理念として

「宗祖聖人から頂いた恩（めぐみ）に応える（報）表現としての法要。そして
宗祖聖人から頂いた恩（めぐみ）を全人類に報せる法要。」

- ・ お待ち受けのあり方。
- ・ 期間中の全国各地での取り組み。
- ・ 今回の御遠忌を迎えるにあたって、育成員（住職・坊守・寺族）が、どのような自覚と、教区・組・寺院で、どのように身を通した教化実践が出来るのか。育成員が再教育される企画も必要。

従前のスタイルから一歩踏み出して、今回の御遠忌では、さまざまな儀式・声明・法要のスタイルが、「御遠忌として成り立つ」ことを本山が表現すべきで、それが、現門首の就任式で示された願いを、継続・発展させることに繋がると考える。

以上

～本プラン提出までの経緯～

1. 一期生にて、宗調の際意見交換（7月31日）。
2. みなさんからのご意見と五百井さんの原案を元に、清さんがメモを作成（7月31日）。
3. 宗祖御遠忌基本計画策定委員の大橋さんより、谷山あてに8月6日に委員会開催の連絡が入る（8月4日）。
4. 清さんのメモを元に谷山が素案文章化（8月5日）。
5. 清さん大橋さん谷山の3名で、素案についてメールにて意見交換し、幹事の秦さんに連絡し検討。
今回は御遠忌策定委員の大橋さんに託す形で「素案」提出をきめる（8月5日）。
6. 御遠忌基本計画策定委員会に原案を提出（8月6日）。
7. 一期生の意見を集約すべく、原案に大橋さんの委員会所感を添えて、一期生全員に郵送（8月13日）
8. FAX・電話にて意見の集約を行った後、清さん、五百井さん、谷山で原案を検討・改訂（8月20日）
9. ふたたび谷山が改訂の原稿を文章化（※今回送付したものです）（8月23日）。
10. 一期生全員に改訂された「一期生プラン」をFAXにて送付（8月24日）。
11. 幹事長、事務局長に「一期生プラン」メールにて送付（8月24日）。
12. 8月26日議員団一泊研修会に提出予定。

以上